俳人協会北海道支部会報
北こぶし

◇発行人
俳人協会北海道支部　大郷石秋
◇発行所
俳人協会北海道支部　事務局
〒005-0841
札幌市南区石山1条2丁目4-18
辰巳　奈優美 方

第74回さっぽろ雪まつり 雪像造り　大通公園

《事業予定》

◇令和六年の新年交礼会・新春句会は、新型コロナウイルスの状況を予測できなかったため見送りました。来年度は五年振りに開催予定です。

◇第十六回俳句大会は、支部創立四十周年記念大会と併称して実施しました。応募数は五〇二句でした。総会において入賞者の顕彰を行います。

◇令和六年第四十回支部定時総会は五月十九日(日)、ホテル札幌ガーデンパレスにて開催予定です。本部理事長能村研三氏を講師に迎えて講演会を行います。

◇秋の吟行会は十月六日(日)、昨年開催できなかった「ゆにガーデン」にて行う予定です。

◇支部創立四十周年記念誌の編集が進められています。詳細は三ページをご覧ください。今年九月に刊行予定です。(陽)

俳人協会・俳句文学館ホームページより 動画配信のご案内

各講師による約一時間の講座動画をご覧いただけます。

○春季俳句講座

令和4年「第一句集を読む—師系を超えて(5)」

第1回 井上弘美『月光抄』桂信子「試練に磨かれた詩魂」
第2回 坂本宮尾『海燕』橋本多佳子「知と情の葛藤」
第3回 能村研三『田園』上田五千石「五千石 星の軌跡」
第4回 森田純一郎『道芝』久保田万太郎「余技の魅力」

令和5年「第一句集を読む—師系を超えて(6)」

第1回 檜山哲彦『長子』中村草田男「一大紺円盤の中」
第2回 中西夕紀『水妖詞館』中村苑子「異界に遊ぶ」
第3回 南うみを『舗道の花』波多野爽波「自由闊達な写生の世界」
第4回 津川絵理子『桃は八重』細見綾子「ふだん着のこころ」

○秋季俳句講座

令和3年「私と季語(2)」

第1回 鈴木しげを「季語は詩語」
第2回 佐怒賀正美「私の親しんできた季語たち」
第3回 岸本尚毅「季語の重みを考える」
第4回 星野高士「季題は友達」

令和4年「私と季語(3)」

第1回 高野ムツオ「個人的季語体験」
第2回 西村和子「季語と人生」
第3回 太田土男「田んぼで詠む」
第4回 谷口智行「こだわりの季語」

令和5年「私と季語(4)」

第1回 今瀬剛一「季感派という立場から」
第2回 仲寒蟬「"戦争"にまさる季語はあるか?」
第3回 八木幹夫「季語とは一体何か」

ーお見舞い申し上げますー

このたび石川県能登半島の地震により被害に遭われた方々に心からお見舞い申し上げます。

第四十回 定時総会のご案内

令和六年五月十九日(日)
ホテル札幌ガーデンパレス
記念講演　能村研三氏

俳人協会北海道支部第四十回定時総会の日程・内容についてお知らせいたします。

◇　◆　◇

◇日　時
令和六年五月十九日(日)
午後一時
・受付開始　午前十一時半より

◇　◆　◇

◇場　所
ホテル札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北一条西六丁目
電話〇一一―二六一―五三一一

◇　◆　◇

◇内　容

①定時総会(13時～14時)
―　議　案　―
・令和五年度事業報告並びに収支決算報告
・令和五年度会計監査報告
・令和六年度事業計画(案)並びに収支予算(案)
・その他の報告・討議

②北海道俳人協会賞発表顕彰

③記念講演(14時～15時)
・講師　能村研三氏
・演題　疾風で駆け抜けた俳句の情熱―福永耕二

④第十六回俳句大会顕彰

⑤懇親会(16時30分～18時30分)
・申込　事前申込
・会費　六千円(当日会場で申し受けます)

《ご連絡》
・「北こぶし」第一〇一号(本号)に返信用葉書を封入致します。総会・懇親会の出欠をご記入の上、お送りく下さい。
・講演・懇親会は会員以外の方も参加できます。お誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。
　なお、懇親会参加ご希望の方は、事前にお申込み下さい。

講師紹介

能村研三氏

〈経　歴〉

一九四九年、市川市八幡生まれ。
一九七一年、『沖』入会、福永耕二の手ほどきを受ける。
一九九三年、句集『鷹の木』で俳人協会新人賞を受賞。
二〇〇一年四月より父・登四郎から『沖』主宰を継承。『沖』の主宰として登四郎の創刊理念の「伝統と新しさ」を引継ぎつつも常に時代を読みその時代の中で俳句の美学を継承する。『ルネッサンス沖』を掲げ更なる革新を図っている。
句集に『騎士』『海神』『鷹の木』『磁気』『滑翔』『肩の稜線』『催花の雷』、随筆集に『飛鷹抄』。
現在、ＮＨＫ学園市川オープンスクール、朝日カルチャー千葉教室、よみうりカルチャー柏教室講師。公益社団法人俳人協会理事長、国際俳句交流協会副会長、千葉県俳句作家協会会長、市川市俳句協会会長、市川市芸術文化団体協議会会長、日本文藝家協会会員。

―作　品―

青林檎置いて卓布の騎士隠る
春の暮老人と逢ふそれが父
兜虫掴みて磁気を感じをり
滑翔のちからを貯めて鷹渡る
滝行者鋼佇ちしてゐたりけり
腕立て伏せ地べたに尽きてあたたかし
初空にルネッサンスの志
列島の反りを極めて寒波急
野火走る固き拳がポケットに
田植機の日を躍らせて折り返す

支部創立四十周年記念誌 編纂状況報告

俳人協会北海道支部は、昭和五十九年六月二十四日に結成され、今年度創立四十周年を迎える。その記念行事の一環としてこれまでの支部の歩みを一冊に纏め、九月に刊行する運びとなった。これに向けて昨年より基金を募り、新たに「記念誌編纂委員会」を立ち上げた。

《編纂委員会》
・編集長　生出　紅南(史　料)
・委　員　河原　小寒(年　表)
　　大内　鉄幹(座談会)
　　中森　千尋(グラビア)
　　宮ヶ丁孝子(　同　)
・オブザーバー
　　大郷　石秋
　　辰巳奈優美

編纂委員会

第一回編纂委員会では「温故知新」をテーマに掲げ、四十年の歴史を振り返ると共に、将来の展望を踏まえながら史誌完成に務めることを話し合った。

「記念誌の内容」
1 グラビア
2 目次
3 挨拶
4 行事
5 吟行会、新春句会、総会句会
　俳人協会創立記念俳句大会
6 北海道俳人協会賞
7 俳人協会北海道支部俳句大会
8 俳人協会北海道支部役員名簿
9 物故者
10 俳人協会北海道支部規約
11 座談会
12 編集後記

◇進捗状況(R6・2月末現在)

《グラビア》
「会報」・「北こぶし」に掲載された写真より抜粋。鮮明で当日の雰囲気が伝わるものを重点に置き、定時総会・記念講演会新春句会・新年交礼会・秋の吟行会・会員の句碑の六項目を年代順に配置。九月より作業を開始しこれまでの分は終了。座談会、総会、講演会は検討中。

《挨拶文》
俳人協会会長大串章氏、北海道支部長大郷石秋氏に挨拶文を依頼済。

《年表》
「俳人協会北海道支部年表」に令和五年「北こぶし」百号以降の主要行事を追加。

《行事～物故者》
この六項目に関しては「北海道支部年表」を元に行事別に抜き出し、一目で明瞭に見られるよう一覧化した。USBメモリ保存。順次入稿。四月から校正作業を開始する。

《規約》
会員名簿に記載されている規約を掲載する。二月入稿。

《座談会》
長年に亘り支部の運営や行事にご尽力頂いた方の座談会を企画。出席者の要請。会場設定。案内状作成及び郵送。当日の司会進行(テーマの設定)。
会場にて録音及び写真撮影。収録テープの文章化(三月末)。
再編集及び校正は四月下旬の予定。

《編集後記》
全ての編集業務終了後に編集長が執筆。

・座談会日程
開催日　二月二十五日(日)
時　間　十時～十三時
於　ホテル札幌ガーデンパレス
・座談会参加者
　大内　鉄幹(司会)
　生出　紅南　河原　小寒
　大郷　石秋　滝谷　泰星
　岡澤　草司　田湯　岬
　辰巳奈優美
・録音・写真
　中森　千尋
　宮ヶ丁孝子

編集長　生出紅南 氏

座談会

第26回 北海道俳人協会賞

令和5年度の刊行句集は以下の通りです。

令和5年度刊行句集

	句集名	著　者	結社名	刊　行
1	白雲の郷	田湯　岬	道	R5.5.3
2	素　風	山下　敦	壺	R5.5.20
3	暗渠の雪	五十嵐秀彦	雪　華	R5.6.1
4	8ビート	中西　史子	河	R5.9.1
5	石狩湾岸三	中村　英史	樹	R5.9.18
6	従　容	小林　道彦	道	R5.9.20
7	光る雪	斎藤　信義	月の匣	R6.2.1

・句集『暗渠の雪』は、第44回鮫島賞受賞決定のため、選考対象外とします。

令和6年3月31日現在

第二十六回北海道俳人協会賞　選考委員

大澤　久子（天　為）
○六〇一〇〇〇五札幌市中央区北五条西十九丁目二十六―五―八〇三

小林布佐子（道）
○七一一〇一七二旭川市西神楽南一条三丁目二五〇―一二八

髙橋　千草（壺）
○六四一〇九五二札幌市中央区宮の森二条十三―十一―二十一―二〇六

竹内　直治（アカシヤ）
○五三一〇〇四二苫小牧市三光町五丁目二十一―五十七

平間　純一（白魚火）
○七一一八一三三旭川市末広三条五丁目十一―十四

※任期は二年（選考繰越の場合を除く）通常、毎年半数を交代

選考条件

①俳人協会北海道支部会員の句集であること。

②令和五年四月一日から令和六年三月三十一日までに刊行されたものであること。

③対象者は、選考委員各氏と事務局あて各一冊を送付して下さい。

★合同句集、遺句集及び既受賞句集は対象外となります。

北海道俳人協会賞選考内規

一、賞の性格
この賞は俳人協会北海道支部の会員が発行した句集を対象とし、最優秀と認められる句集の著者を顕彰するものとする。

二、選考の対象
四月から翌年の三月の年度内に刊行した句集で、遺句集、合同句集及び既受賞者は対象としない。

三、選考委員
選考委員は五名とし、支部長が選出し委嘱する。選考委員の任期は二年とし、毎年半数交代とする。

四、選考の方法
第一次審査は書面による推薦とし、第二次審査は選考委員の合議による選考とする。顕彰に値する句集がないと認められるときは、該当者なしと決定する。

五、結果の発表
選考の結果は、最近に発行する会報に掲載するとともに、受賞者本人に通知する。

六、顕彰の方法
顕彰は、支部の定時総会に於いて行い、正賞として表彰状、副賞として賞金五万円を、それぞれ贈呈する。

事務局の一年

事務局長　辰巳奈優美
事務局次長　中森千尋・陽美保子
事業部　中森千尋・奥野津矢子・小林道彦
編集部　陽美保子・宮ケ丁孝子
会計　西田美木子

左記の他、北こぶし初校・再校、支部四十周年記念誌の編集・校正作業を自宅にて実施

・四月十一日
令和四年度第二回理事会
（於・かでる2・7会議室）

・五月十一日
北海道支部第三十九回定時総会打ち合せ
（於・ホテル札幌ガーデンパレス）

・五月二十九日
俳句大会入賞者へ賞品発送
（於・かでる2・7活動センター）

・六月二十九日
支部四十周年記念編集委員会

・七月十三日
秋の吟行会下見及び事務局会
（於・ゆにガーデン）

・七月二十四日
支部四十周年記念誌編集委員会
（於・かでる2・7活動センター）

・八月二十一日　秋の吟行会準備
（於・かでる2・7活動センター）

・九月四日
北こぶし百号記念号割り付け
（於・かでる2・7活動センター）

・九月十一日　記念誌編集委員会
（於・かでる2・7活動センター）

・九月二十七日
北こぶし百号記念号発送
（於・かでる2・7活動センター）

・十月四日　記念誌編集委員会
（於・かでる2・7活動センター）

・十一月八日　記念誌編集委員会
（於・かでる2・7活動センター）

受贈俳誌より

「アカシヤ」三・四月号

散策に立ち寄るカフェや帰り花　髙木　則子
まだ会へぬ嬰にも包むお年玉　竹内美枝子
積ん読の減りさうもなき師走かな　石窪　昭人
新しき雪をまた掻く二日かな　中谷　真風
山寺や朝日に映ゆる大氷柱　矢野　知子

「葦牙」二月号

虎落笛空に躓きたる叫び　伊藤　玉枝
煮凝のふるへ取り分け夫婦箸　園部早智子
初氷まぶし社の手水鉢　松本きよし
立冬や夕陽思はぬところより　宮田春夢子
まつすぐに呼ばれもしない冬が来る　田中源之助

「雲の木」三月号

雪掻いて今朝の一本道つくる　加賀谷良子
露天湯や氷柱越しなる滝の音　山内　元子
あんぱんは三時のおやつ女正月　伊藤　淳雨
百歳を野辺に送りし余寒かな　更科　武四
追ふやうに追はれるやうに雪の雲　大原登美子

「雪嶺」一・二・三月号

駅売の林檎を二つ膝に乗せ　山本　圭子
一縷なる蔦の一念のぼりゆく　木村　忠子
ハモニカの音色は秋の風に乗せ　近藤ゆたか
ねこの眼の深き琥珀や秋夕焼　嶋田喜四郎
腸を食べる食べない初さんま　藤嶋　正
冬仕度だんだんこころ遅れけり　加門　勝

「壺」二月号

オホーツクの沖黒々と冬の浪　磯江　波響
骨拾ふ冬日の白を思ひつつ　石坂　憲文
一行の書き出しがたく氷雨かな　近藤　良子
とりどりの色の終焉濡れ落葉　横山　美卯

「道」三月号

あともどりしたき齢や葛湯吹く　長谷川麦雨
角丸き千代女の硯石蕗の花　小林布佐子
境涯を語り合ふかに枯木立　庭田　一美
子の名前忘れし母と冬ごもり　赤繁　大河
つはぶきの黄に染まりゆく里帰り　小倉　和子

「ピリカ」二月号

胸中の燠吹きそだて年迎ふ　森谷　杏里
海陬を袋叩きに雪しまく　土門きくゑ
俎始主婦にも七つ道具あり　長曽我部弓子
辛抱の棒太うして寒の入り　安田　潤子
若水やアールグレイの封を切り　根本　絢子

・十一月二十日　事務局会議
（於・かでる2・7活動センター）
・十一月三十日
令和五年度第一回理事会
（於・かでる2・7会議室）
・一月十五日　記念誌編集委員会
および俳句大会作品初校
（於・かでる2・7活動センター）
・一月二十五日　俳句大会作品再校
（於・かでる2・7活動センター）
・二月十七日　記念誌編集委員会
（於・かでる2・7活動センター）
・二月二十五日　記念誌座談会
（於・ホテル札幌ガーデンパレス）
・三月一日
北こぶし（101号）割り付け
（於・かでる2・7活動センター）
・三月四日　俳句大会結果初校
（於・かでる2・7活動センター）
・三月十四日　俳句大会結果再校
（於・かでる2・7活動センター）
・三月二十九日
北こぶし（101号）発送
（於・かでる2・7活動センター）
（陽　美保子　記）

会員の皆様へ

会員の皆様におかれまして、入退会また、その他のお問合せの際は、支部事務局　辰巳奈優美
☎011(591)4609までご連絡下さいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

― お願い ―

昨年に引き続き、支部創立四十周年記念事業の基金を募ります。会費納入の払込用紙にてお願い致します。（一口千円）

受贈句集紹介

◇『神のまにまに』（楡印刷）
池野やまべ（道・草の花）

本句集は『徒花』『樹雨』に次ぐ氏の第三句集である。令和三年五月から令和五年四月までの六二二句を納める。扉には句集名ともなった「黄心樹は神のまにまに咲き散りぬ」の一句を掲げ、自選句及び俳誌「道」・俳誌「草の花」・月刊「俳句界」の受賞句、特選句、巻頭句を配する。季節感溢れる言葉選びや、みやびの世に繋がる美しい古語など、豊かな知識から編み出される作品は何れも大らかで味わい深い。氏は俳句の最も大きな喜びは、多くの連衆と共に学ぶ事と述べている。巻末には「連衆一人一玉」のページを設け、学びの成果を共有する心温かい指導者としての姿も窺える。

・蓬摘む「籠もよみ籠持ち」口遊び
・雁の棹帰心のかたち崩れざる
・曾遊の野辺の秋蝶影うすし

（R5・6・30刊）

◇『8ビート』（文學の森）
中西　史子（河）

本句集は現在「河」銀河集同人である氏の第一句集である。平成七年「河」入会より三十年に亘る発表句の中より二一六句を厳選し六章に組んだ。句集名は「白靴のジャズマンの踏む8ビート」より角川春樹主宰が命名、更に主宰による懇切丁寧なる跋文にて掲句は代表句として高い評価を得ている。広い見地からの作品評は二十ページにも及ぶが、これも句歴三十年が物語る日々鍛練の賜に他ならない。「魂の一行詩」を追及し自分の心に素直に、そして自然体で作句に臨む史子氏の作品は、瑞々しい内生の声と季語とが絶妙に響き合い、瀟洒な雰囲気を醸し出している。

・水鳥の水の鼓動に眠りをり
・かりがねやマリアは深き海を抱く
・ゆく秋や止まり木で聴くスロージャズ

（R5・9・1刊）

宮ケ丁孝子　記

◇『石狩湾岸三』（文學の森）
中村　英二（樹）

『石狩湾岸』『石狩湾岸二』に続く第三句集で、前二句集収録句も掲載する。

「『今生』が『戦争の生』だとしても、俳句生活は揺るがなかった。俳句が庶民の日常の実生活、実体験、実感動の表現である限り、揺らぐ筈がなかった。そこには、人間が、地球という自然から生れ、群れを作ることによってのみ生き延びた生物であり、本来的に人間性を保有し、俳句が戦争を拒否する側に在るという信頼があったからである」と「あとがき」に述べる。俳句に全幅の信頼を寄せた氏の集大成とも言える一冊。

・雪解了へ石狩大河澄みはじむ
・解雇通知捩り焚火の種火とす
・とんぼの死水に無言の輪が生れ
・湯たんぽや遠退く日々も温めて

（R5・9・18刊）

◇『従容』（アイワード）
小林　道彦（道）

「道」創刊者北光星生誕百年の年に発刊された「道」編集長の第一句集。句集名は〈豪雪に従容として開拓碑〉から。

屯田兵三代目を父に持ち、生まれ育った北海道の自然や歴史、開拓、アイヌの歴史や文化、さらには育ったお寺や宗教に関わる多彩な句を収録する。これからも北海道に根差した俳句を作りたいという。

「師（源鬼彦）の妥協を許さない言葉選びを、道彦さんも徹底し、新しい風土の句を目指していくことでしょう」と田湯岬主宰は序でエールを送っておられる。

・眼力はいまだ健在捨案山子
・ふるさとへ届かぬ鉄路赤蜻蛉
・石狩の大地を分かつ雪解川
・風神の涙痕のごと大氷柱

（R5・9・20刊）

陽　美保子　記

◇『光る雪』（文學の森）
斎藤　信義（月の匣）

句集『神色』『天景』『氷塵』『雪晴風』に次ぐ、氏の第五句集。平成二十五年『氷塵』にて鮫島賞、同三十年『雪晴風』にて北海道新聞俳句賞を受賞されている。句集名は「最北の地にちりばめむ光る雪」の作品から採られたとのこと。「北海道は歳時記の季節とは合致せず、ほとんどがズレており、この地の季に添って編集している」と、あとがきに述べる。本句集に於ても、一句十三字書きのスタイルを変わらずに貫き、北海道の風土を豊かに詠んだ一集。

・しろがねの日輪へ翔つ尾白鷲
・一切の音消す雪となりにけり
・地上にも地下にも都ありて冬

（R6・2・1刊）

◇『息災』(本阿弥書店)
染谷　秀雄(秀)

平成二十五年から令和五年春までの三三六句を収めた、氏の第三句集。「屋根」の斎藤夏風、「花鳥来」の深見けん二の二師を続けて亡くされたが、病床の夏風氏に勧められるまま「秀」を創刊したとのこと。句集名は同居する兄上を詠んだ「九十の兄の息災冬はじめ」から採られたもの。あとがきでは「兄弟たった一人となった兄に長く生きてもらいたいと思っている」と述べる。

公益社団法人俳人協会理事・事務局長。日本文藝家協会会員。

・ひるがへりたる寒鯉に水の嵩
・ほつれきて鳰の浮巣の藁や草
・柴漬を仕掛けて朝の戻り舟
・汲置の火防の水も寒の内

(R5・9・1刊)
辰巳奈優美　記

―訂正とお詫び―

北こぶし一〇〇号19頁米山幸喜さんの句集名、『炎天』は**正しくは『炎帝』**です。ここに訂正してお詫び申し上げます。

新会員紹介

俳号(所属結社誌)
①簡単な俳句歴
②自選の一句

赤繁　大河(道)　石狩
①平成二十七年「石の花」入会
令和三年「道」入会
②雪がふるおとぎ話をするやうに

天野　浩美(鷹)　名寄
①現在「鷹」所属
②明日来ることの明るさ今年米

石山　初音(壺)　札幌
①令和二年「壺」入会
②春北斗北の夜空の大時計

泉澤　正子(アカシヤ)　千歳
①平成十年「アカシヤ」入会
令和二年「アカシヤ」同人
②僧堂に衣擦れの音寒旱

伊藤　泰山(嵯峨野・道)　大樹町
①平成二十八年「道」入会
令和元年「嵯峨野」入会
②切り株は考の駒留麦の秋

小池　澄子(天為・道)　札幌
①平成三十年「天為」入会
令和四年「道」入会
令和五年「天為・道」同人
②茫洋と向日葵うなだれて黒し

幸村　千里(鷹)　旭川
①「舷燈」同人(現在廃刊)
「鷹」入会
②舌打と思ふ夕立の一滴目

今　雅子(いには)　苫小牧
①令和二年「いには」入会
②月朧スープに浮ぶ溶き卵

斉藤　妙子(白魚火)　苫小牧
①平成二十九年「豆の木」入会
その後「知更鳥」に合流
②鉛筆を銜へて思案日焼けの子

根本　絢子(ピリカ)　札幌
①平成十五年「朝」入会
平成二十九年「若葉」入会
令和四年「ピリカ」入会
②老木に大き洞あり木の実雨

星　伸昭(鷹・雪華)　札幌
①平成十二年「鷹」入会
平成二十九年「雪華」入会
②水を買ふ月の遊牧民のごと

三輪禮二郎(香雨)　札幌
①平成二十五年「狩」入会
令和五年「香雨」同人
②競市の牛の尿する遅日かな

森　和風(道)　札幌
①平成二十七年「道」入会
②花盛りベンチの側の松葉杖

安田　潤子(ピリカ)　石狩
①平成十六年「青女」入会
平成二十年「若葉」入会
令和四年「ピリカ」入会
②幼子に初のともがら小鳥来る

遠藤　孝明(アカシア・霊取)　日高町
①平成五年「アカシヤ」入会
平成十年「雲取」入会
平成十一年「雲取」同人
令和二年「アカシヤ」無鑑査同人
令和五年「アカシヤ」副主宰
②軒に住む雀は身内明易し

長曾我部弓子(ピリカ)　洞爺湖町
①平成元年「青女」入会
平成十五年「愛媛若葉」入会
平成二十六年「若葉」入会
令和五年「ピリカ」入会
②噴火湾にごろりと秋の大落暉

風韻帳

おめでとうございます

★第38回北海道新聞俳句賞
名取　光恵氏『羽のかろさ』

★第44回鮫島賞
五十嵐秀彦氏『暗渠の雪』

★第30回俳人協会俳句大賞に次の方々が入選されました。
・石嶌　岳選　奥野津矢子氏
・鈴木　太郎選　大内　鉄幹氏
・中西　夕紀選　大内　鉄幹氏

謹悼

■**笠原　敦子(ピリカ)**
R5・12・21(90歳)

雪霏々と樺太犬をまぼろしに
啓蟄の鳩目をぽんと開けにけり
(「ピリカ」第七・八号より)

俳人協会北海道支部 第十六回 俳句大会速報

一位(13) 切手ほどの灯台の窓鳥渡る　岡崎水野幸子
二位(11) もう五分待とうマフラー巻き直す　北見真壁静江
二位(11) 落葉踏む嬉しき時は良き音に　札幌斉藤みつ子
二位(11) 寒波来る地球の軋む音のして　江別西村榮一
三位(10) 灯を消して蛍に闇を譲りけり　石狩赤繁大河
三位(10) 皺の手にクリーム勤労感謝の日　小樽石井こう子
四位(9) 雪晴や市電の映る理髪店　札幌宮ヶ丁孝子
四位(9) 割算の余りのやうに生きて秋　札幌平川靖子
四位(9) 月光の雫を絞る軒氷柱　札幌小松正幸
四位(9) 早蕨や風車の丘へ牛放ち　札幌池上純子
五位(8) 廃鉱の立坑櫓十三夜　札幌谷口浩文
五位(8) 日向ぼこうとうと昭和へと戻る　旭川斎藤良子
五位(8) 逆上がり教へ合ふ子ら若葉風　札幌佐藤やす美
六位(7) 新涼の垂直に立つ米袋　札幌陽美保子
六位(7) 蝦夷富士のふんはり歪む石鹸玉　小樽橋本和男
六位(7) ふるさとの紅葉栞りし時刻表　札幌吉野早苗
六位(7) 花詞信じて買ひぬ種袋　大樹伊藤やす

※カッコ内は得点です。
※作品は同点の場合、特選句を優先とし投句の到着順としました。

事務局&編集室

◆昨年十月結社「白魚火」の全国大会が札幌で初めて開催されました。コロナ禍で延び延びになっていましたが無事終り、オール北海道の会員で頑張れた事は今後の作句活動の力になってくれると思います。コロナ感染前は想像も出来なかったリモートでの打合せ、パソコンでの句稿作成、大会入賞句はプロジェクターでスクリーンに映し出され参加者には好評でした。

時代の流れに乗り遅れないようにと必死に付いて行く自分が可哀相でありおかしくもありました。年を重ねての学びは時間が掛かる、結果が出ないその前に理解出来ない。何て頭が悪いんだろう、これは年のせいだと嘆きながらの楽しい時間でした。

年始から大変な生活を強いられている被災者の方達のことを思うと心が痛みます。早く普段の生活に戻れますようにと祈っております。　（奥野津矢子）

◆本州では「河津桜」が一足早い春の訪れを告げているが、今こちらは真冬日。北国の春はなかなか簡単にはやって来ない。

この長く厳しい冬ではあるが、楽しいこともある。大きなライラックの木の横に何年も使っている餌台がある。ここに近くの森から野鳥たちが餌を食べに集まって来るのだ。ひまわりの種を器用に啄む四十雀、山雀、シメなどは毎日のように顔を出す。今朝は鶫がきた。一度赤啄木鳥が目の前で木の幹を突く所を見た。ガマズミの赤い実を目当てに鶫も番でやってくる。

こんな小さな命が懸命に生きている姿に日々力をもらい、春の訪れを心待ちにしている。

（宮ヶ丁孝子）

編集後記

▽第十六回俳句大会には多数のご応募をいただき、ありがとうございました。本号に俳句大会作品集を同封致します。

▽今年は俳人協会理事長の能村研三氏をお迎えして、支部総会に続き講演会を開催します。講演会・懇親会は会員外の方も参加できますので、お誘い合わせの上ご参加ください。

▽本号に、総会出欠葉書（締切）および会費振替用紙を封入しますので、葉書の提出および会費・記念誌基金のご協力をよろしくお願い申し上げます。

▽今年は年明け早々能登半島地震、飛行機事故と災難が続き、とんでもない幕開けとなりました。流感やコロナも収まっていません。皆様どうぞくれぐれもご自愛ください。　（陽）